

## 神のような魔のような

辻 憲男 (文学部教授)

須磨は秋であった。雨の降る夕方、康子は清三を散歩に誘った。須磨寺の山門の下で休んだあと、康子は傘をひろげようとしながら清三の顔を見て言った、「あなた、生きている目的がわかりますか」「目的ですか」「生活の目的ではなく、生きている目的よ」。清三はちょっと康子の言う意味がわからなかった。康子は清三の返辞を待つようすもなく、さっと傘をひらいて雨の中に歩み出た。清三は自分が失敗したと思って顔が熱くなった。二人は傘を並べて黙って寺の前まで戻り、静かに石段を下りた (山本周五郎「須磨寺附近」) = 写真。

作中、美貌の康子は、清水清三の親友の兄嫁。その須磨の家に寄宿して、清三の心は癒された。六甲山の紅葉や新開地の松竹座の芝居。思わせぶりの、誘うような康子の瞳に悩まされた。「悲劇的な感傷が頭の中で火のように閃(ひらめ)き回る、叫び出すかもしれない」と、思わず自分の口をふさいだ。風邪で寝込んだ清三に、康子はアメリカ在勤の夫のもとへ旅立つと告げた…。

歴史小説の巨峰・山本周五郎は、本名清水三十六(しみずさとむ)。明治36年(1903)の生まれなのでこの名である。家の事情で上の学校へ行けず、東京の質店に奉公した。恩人の店主の名をペンネームにもらった。関東大震災で神戸に来て、元町の雑誌社に勤めた。甘くほろ苦い恋が20歳の純情を浸した。都落ちした男が女性とめぐり逢うというのは例の源氏物語のパターンだが、清水青年の場合、この初恋が生涯追い求めるテーマの開眼となった。



後年、作者はこの幼いデビュー作を嫌った。  
今は新潮文庫『花杖記』などに収める。